

3 スーパーの店先で

お母さんといっしょに買い物に行くところ、駅のきさつを出て、階段を下りようとしていた時、

「じしんによるひさい者のために、ぼ金をお願いします。」

と、ぼ金活動をしている人たちがいました。

お母さんに、

「元氣くん、ぼ金をしてきたら。」

と言われましたが、ぼくは、

「みんなが見ているし、はずかしいからいやだよ。」

と言って、急いで階段を下りてきてしまいました。

帰り道、お母さんから、

「何でぼ金をしなかったの。」

と言われても、何も答えられませんでした。

次の日曜日の朝、お母さんから、

「今日はスーパーで、ミネラルウォーターが一人二本買えるから買ってきてくれる。」

お店の人は、

「お気持ちはわかりますが、お客様だけ特別にするわけにはいかないのです。わかってください。」

と答えていました。

その後も、

「何とかたのむよ。これからひなん所に行くのに、ぜひ、水をとどけたいんだよ。」

と、うったえていました。

結局、男の人

の願いはかないませんでした。

水を二本だけ手

にして、かたを落

としてレジに向か

う男の人の後ろす

がたを見て、何だ

かかわいそうに思

えてきました。



と、たのまれました。

あのしんさいの後、ミネラルウォーターがすぐに売り切れてしまいます。早く行かないと、また売り切れてしまうと思い、ぼくは急いで自転車に乗り、スーパーに向かいました。

ミネラルウォーターの売り場に近づくと、とつぜん、

「何でだめなんだ。」

という大きな声が聞こえてきました。見ると、七十さいくらいの男の人が、お店の人につめよっているところでした。男の人は、

「親せきが、つ波でひ害を受けて、気仙沼のひなん所にいるんだよ。でも、飲む水がなくてこまっていると、さつき連らくがあつて、何とか飲み水をとどけてほしいとたのまれたんだよ。だから、少しでもたくさんの水を持って行ってあげたいんだ。わかってくれよ。ぜひ、二本と言わずにもっと買わせてくれよ。」

と真けんにたのんでいました。

ぼくは、手にした二本のミネラルウォーターを、じっと見つめていました。

ぼくは急いでレジに向かい、お金をはらうと、男の人の後を追いかけてきました。

ちゆう車場にいた男の人を見つけ、

「おじさん、ぼくのこの二本もひなん所の人にとどけてください。お願いします。」

と、ミネラルウォーターを差し出しました。

男の人はびっくりしたようでしたが、二本のミネラルウォーターを受け取ると、ぼくの手をしっかりとにぎり、

「ありがとう、ありがとう。」

と何度も頭を下げて喜んでくれました。

ぼくは、男の人の車を見送りながら、何だか気持ちがほかほかとしてきて、うれしくなりました。